

3. 先々月・先月の両園地の探鳥会報告

2022/7ほしだ園地 曇り気味でわりと過ごしやすい探鳥会でした。植物園の森にさしかかった所でカワセミが川の上の枝に長く留まり、皆さんしっかり見る事が出来ました。日の出橋を過ぎたところで、キジバトぐらいの茶色のタカが出ましたが、同定できずタカSPとしました。園地に着く前にキ、ハク、セグロセキレイをゲット。食事後、吊り橋に着く前にアマツバメ・ヒメアマツバメの群れが出て帰りの管理棟付近でイワツバメ・コシアカツバメの群が出ました。コゲラ2羽、ヤマガラ1羽、エナガ・シジュウカラ・オオルリ・キビタキは確認できなかったが、ツバメとつく種が5種も観察したことが今日の特記でした。

2022/9ほしだ園地 何時も鳥の多い私市集落～星の里いわふねまではイソヒヨドリ・ツバメ・コシアカツバメ(群)などがでたものの、山地に入ってから静かになり、ヒヨドリ・ハシブトガラスの鳴き声だけでした。タカが飛ぶことを期待し資料にサシバ・ハチクマを入れたが、1羽飛んだものの遠すぎて種名が判らなかった(タカSP)。渡りの小鳥(コサメ・エゾビタキ、キビタキ等)も全くでないまま、留鳥もヤマガラ・エナガ・シジュウカラ・メジロが出たのみだったので、帰りでカワセミが出てほっとした。トータル20種になったが、1羽ずつの種が多く、個体数が85羽にとどまった。

4. 日本野鳥の会大阪支部からのお知らせ

当面「**申込制**」で実施。大阪支部HPで探鳥会情報をご確認ください。

①北河内の定例探鳥会(2022(令和4)年11月度)案内

曜日	(月日)	場所	集合時間・場所
第1(日)	11/6	枚方淀川	9:00京阪枚方市駅下車・ラポールひらかた前
第3(土)	11/19	緑の文化園	9:00JR学研都市線四条畷駅東口

第4(土) 11/26ほしだ園地 9:30京阪交野線私市駅前

②日本野鳥の会入会時の会費

会員区分 (内容)	おおぞら会員 (本部+支部)	赤い鳥会員 (支部のみ)	むくどり会員 (支部・但し1年のみ)
年会費	7500円	3500円	1000円
入会金(初年度のみ)	1000円	1000円	—
会報 隔月刊(支部) (本部)	「むくどり通信」 「野鳥」	「むくどり通信」 —	「むくどり通信」 —

③参加費大阪支部会員100円 非会員300円(交野野鳥の会のみ会員も)

④探鳥会参加時の心得

大阪支部では探鳥会のリスクマネジメントを重視することとなり、ほしだ園地・くろんど園地も、簡単な安全管理マニュアルを作成しました。最大の問題は、ケガなどの時、救急車を呼んでも、両園地探鳥会コースに、**救急車に来てもらえない区間がある**ことです。参加希望者は「体調不良時は自主的にお休み」「参加時は怪我をしないよう気を付ける」ことをお願いします。

府民の森くろんと園地探鳥会

(毎月第4土曜日 両園地通算第260回)

令和4(2022)年10月22日(土) 9:30～15:00

日本野鳥の会大阪支部 平軍二(090-6901-1425)

友田武・神戸徹・近藤輝男・沖光二

22年前交野市にある両園地は、奇数月くろんと園地、偶数月ほしだ園地でスタートした。その後、

①ほしだ園地でハヤブサの営巣が始まり、ハヤブサ・ヒナの観察適期が5月下旬

②くろんと園地のカラスザンショウにムギマキがくることがわかり10月下旬が観察適期

ことから、2019年に両園地の開催月を、ほしだ園地を奇数月、くろんと園地偶数月に入れ替えた。しかしその後、コロナ中止などもあり、くろんと園地探鳥会でムギマキ観察ができていないので、今年こそはムギマキを観察したいと思っている。

1. 交野の鳥シリーズ(110) ムギマキ

大阪支部はムギマキを観察するために神戸市西側の菊水山(餌場はカラスザンショウ)へ行っていたこと、交野野鳥の会の皆様は先週神戸森林植物園(餌場はゴシュユ(薬用植物))で堪能されているなど、ムギマキは主食としている木の実のある所でのみ観察されている観察例の少ない鳥である。



↑ムギマキ(沖光二氏(20181030))

私(平)は大泉緑地でモッコクに来ることを教えてもらい、その後万博公園のモッコクでムギマキを見たものの、単発的でその後は見ていない。

←交野のムギマキ観察日数(友田武氏)

年	観察日数
2015年	2
2016年	4
2017年	2
2018年	11
2019年	11
2020年	8
2021年	10
2022年	0

今回3年ぶりにムギマキの季節にくろんと園地探鳥会を開催するが、友田氏による記録(左表)は、今年はまだ観察されていないので、今日観察できるかどうかわからないのが残念である。

ムギマキ種名

右表のとおりムギマキは標準和名・漢字名だけでなく、学名・英語名にも和名と同じムギマキがつ

標準和名	ムギマキ
漢字名	麦播
学名	Ficedula mugimaki
英語名	Mugimaki Flycatcher

いている唯一の鳥です。

←繁殖・越冬地(左図:真木・大西

日本の野鳥590)を見るとサハリン・ロシア東部・中国東北部が繁殖地、東南アジアが越冬地となっているので、学名用の標本が渡り途中の日本で採取されたため、日本で繁殖している鳥のように、和名が学名にもつけられたと推定されます。尚、ムギマキは晩秋、麦の種をまく時期に日本を通過するため、名づけられたとのことです。



2. 今日観察した鳥

科名	種名	年 月 日	2021			2022			科名	種名	年 月 日	2021			2022		
			10 23	11 27	12 25	9 24	10 22	10 23				11 27	12 25	9 24	10 22		
			回数 No	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど				回数 No	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど
		253 モニ	254	255	259	260			253 モニ	254	255	259	260				
キジ	ヤマドリ	4						ミサゴ	ミサゴ	339							
キジ	キジ	5						タカ	ハチクマ	340							
カモ	ハクチョウSP	19						タカ	トビ	342							
カモ	オシドリ	24						タカ	ツミ	354							
カモ	ヨシガモ	27						タカ	ハイタカ	355			1				
カモ	ヒドリガモ	28						タカ	オオタカ	356		1					
カモ	マガモ	30						タカ	サシバ	357							
カモ	カルガモ	32				3		タカ	ノスリ	358							
カモ	ハシビロガモ	34						カワセミ	カワセミ	383				1			
カモ	コガモ	38						キツツキ	コゲラ	390	2	2	4	1			
カモ	ホシハジロ	42						キツツキ	アカゲラ	393							
カイツブリ	カイツブリ	62						キツツキ	アオゲラ	397							
ハト	キジバト	74	4	1	2	6		ハヤブサ	チョウゲンボウ	401							
ハト	アオバト	78						ハヤブサ	ハヤブサ	407		1					
コウノトリ	コウノトリ	119						サンショウクイ	サンショウクイ	412							
ウ	カワウ	127						カササギヒタキ	サンコウチョウ	418							
サキ	ゴイサギ	139						モズ	モズ	420	1			2			
サキ	ササゴイ	141						カラス	カケス	427							
サキ	アオサギ	144				1		カラス	ハシボソガラス	435	1		2				
サキ	ダイサギ	146						カラス	ハシブトガラス	436	16	10	9	9			
サキ	コサギ	148				1		カラス	キクイタダキ	438							
クイナ	バン	174						シジュウカラ	コガラ	441							
クイナ	オオバン	175						シジュウカラ	ヤマガラ	442	6	5		1			
カッコウ	ホトギス	185						シジュウカラ	ヒガラ	443							
カッコウ	ツツドリ	187						シジュウカラ	シジュウカラ	445	1	1	1	1			
アマツバメ	アマツバメ	192						ツバメ	ツバメ	457				1			
アマツバメ	ヒメアマツバメ	193						ツバメ	コシアカツバメ	459				12			
チドリ	ケリ	195						ツバメ	イワツバメ	461							
チドリ	コチドリ	203						ヒヨドリ	ヒヨドリ	463	30	10	37	10			
シギ	イソシギ	244						ウグイス	ウグイス	464	2	2	1				

和名と逆転した学名の不思議(コマドリ・アカヒゲ)

鳥の学名に和名が入っている鳥の中で、和名と違っている鳥を紹介したい。
繁殖期の囀りを「ヒンカララ」と聞きなしされていて、馬のいななきに似ていることから、馬を表す「駒」という字を使って「駒鳥」という和名がつけられたようですが、そのコマドリの学名が *Luscinia akahige* である。一方アカヒゲ「赤髭」の学名は *Luscinia komadori* である。日本で両種を間違えることがないので、学名つけられる時点で、標本に逆の名札がつけられたようである。

コマドリ 英語名 Japanese Robin 学名 *Luscinia akahige*
アカヒゲ 英語名 Ryukyu Robin 学名 *Luscinia komadori*

学名は一度つけられると変更できないというルールがあり、和名と違っているとわかっても改定されていない。日本では違和感があっても海外では違和感がないこと、むしろ和名コマドリ・アカヒゲより、英語名が“Japanese”“Ryukyu”と生息地表示となっておりわかりやすい。

科名	種名	年月日 回数 No	2021			2022			
			10 23	11 27	12 25	9 24	10 22		
			く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど		
		253 モニ	254	255	259	260			
ウグイス	ヤブサメ	465							
エナガ	エナガ	466	11	1	5	3			
ムシクイ	オオムシクイ	476							
ムシクイ	メボソムシクイ	477							
ムシクイ	エゾムシクイ	479							
ムシクイ	センダイムシク	480							
メジロ	メジロ	485	11	16	10	8			
ヨシキリ	オオヨシキリ	492							
レンジャク	キレンジャク	500							
レンジャク	ヒレンジャク	501							
ミソサザイ	ミソサザイ	504							
ムクドリ	ムクドリ	506							
ムクドリ	コムクドリ	508							
カワガラス	カワガラス	512							
ヒタキ	トラツグミ	514							
ヒタキ	マミチャジナイ	520							
ヒタキ	シロハラ	521		1	2				
ヒタキ	アカハラ	522							
ヒタキ	ツグミ	525							
ヒタキ	コマドリ	530							
ヒタキ	ルリビタキ	536		4					
ヒタキ	ジョウビタキ	540		5	2				
ヒタキ	ノビタキ	542							
ヒタキ	イソヒヨドリ	549				2			
ヒタキ	エゾビタキ	552							
ヒタキ	サメビタキ	553							
ヒタキ	コサメビタキ	554							
ヒタキ	キビタキ	558	1						
ヒタキ	ムギマキ	559							
ヒタキ	オオルリ	561							

科名	種名	年月日 回数 No	2021			2022			
			10 23	11 27	12 25	9 24	10 22		
			く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど	ほ し だ	く ろ ん ど		
		253 モニ	254	255	259	260			
イワヒバリ	カヤクグリ	566							
スズメ	ニューナイスズ	568							
スズメ	スズメ	569		1		19			
セキレイ	キセキレイ	573	1	1	1	1			
セキレイ	ハクセキレイ	574		3					
セキレイ	セグロセキレイ	575		5		2			
セキレイ	ビンズイ	580							
アトリ	アトリ	586							
アトリ	カワラヒワ	587			2				
アトリ	マヒワ	588							
アトリ	ベニマシコ	592							
アトリ	ウソ	599							
アトリ	シメ	600							
アトリ	イカル	602							
ホオジロ	ホオジロ	610							
ホオジロ	カシラダカ	617							
ホオジロ	ミヤマホオジロ	618							
ホオジロ	アオジ	624			7				
ホオジロ	クロジ	625			2				
キジ	コジュケイ								
ハト	カワラハト(トハト)				5				
チドリ	ソウシチョウ		2		1				
	ムシクイSP								
	タカSP								
	マルガモ			1					
							1		
観察種数合計			14	19	18	20			
個体数			89	71	94	85			
天候			晴	晴時々曇	晴時々曇	晴			
参加者			4	11	11	8			

属名・種小名ともにニッポン 学名の不思議(トキ) Wikipediaより

日本の国鳥はキジとなっているが、学名に **Nipponia nippon** と日本がダブルで入っていることで、日本を代表する鳥となっているトキの学名が当初と変わっていることを知りました。

標準和名 **トキ** 漢字名 **朱鷺・鶺鴒** 英語名 **Crested Ibis** 学名 **Nipponia nippon**

シーボルトが1828年にオランダへ送った標本により、テミンクが1835年 "**Ibis nippon**" と命名、しかし1852年にライヒエンバッハが "**Nipponia temmincki**" と全く新しい学名を命名した。学名は先取権の原則により最初につけられた方が有効となるので、ライヒエンバッハの命名は種の名称としては無効だが、属の命名としては新属を提唱したと見なされ、ライヒエンバッハの属名とテミンクの種小名をあわせた "**Nipponia nippon**" は、1871年にグレイによって初めて用いられた。1922年には日本鳥学会の『日本鳥類目録』で採用されたこともあり、現在ではこの学名が一般に用いられるようになった。